試練から逃げず成長を

前田道路 常務執行役員北関東支店長
西場　慎一氏

道路の現場は比較的短いサイクルで全国各地を転々とするイメージがあり、そういう遊牧民的な生活もいいなと学生時代に考えていました。当社に入ると、最初の4年間は品川作業所で東京都内の現場を中心に回りました。当時、全国の作業所の中で一番の売り上げ規模だったこともあり、人事の方から「頑張れ」と激励してもらったのを覚えています。

1週間の新人研修を終え、品川作業所に着くまで仕事だけでなく、これからの都会暮らしにもわくわくしていました。作業所が入る建物は、1階が置き場、2階が事務所、3階から上の階が独身寮。部屋を案内してもらうと、2DKの各部屋に2段ベッドが置かれ、複数人が一緒に暮らすのだと知りました。今は個室が当たり前ですが、当時はそれが普通でした。最初は正直戸惑ったものの、相部屋での生活もいつの間にか気にならなくなりました。

3年目ぐらいまでは自分が何を分かってないのかも分からず、とにかく無我夢中の日々。作業員の方々は自分の父親や祖父らと同じぐらいの年齢でしたから、よく怒られもしました。

夜間作業の現場が多く、なかなか自分の時間が持てない中で、仕事を続けることに迷うこともありました。そんな時、先輩から「みんなそれぞれ悩みがあり、神様は平等に試練を与える。そこから逃げずに一つ一つクリアしていくことが成長につながるのだ」と諭されます。

現場ではさまざまな問題・課題が山積しています。そうした試練を乗り越え、自分たちで舗装した道路をクルマが走行した時やお客さまなどから「ありがとう」と言われた時の満足感、達成感は大きなやりがいです。若い頃は上司や先輩からの「頑張ったな」の一言にも癒やされました。いろいろ苦労があっても続けてこられたのは、それ以上に得られるものがあったからだと思います。

入社2年目ごろ。品川作業所時代の独身寮で

5年目からは埼玉方面の作業所に移り、すぐさま市道の拡幅工事の現場を任されます。それまで下請工事ばかりを担当してきた自分にとっては初めての元請工事。役所に提出する書類作成なども最初から最後まで一人でやったことがなく、非常に苦労したのですが、発注者である市の担当者がまるで弟の面倒を見るかのように、親身になってサポートしてくれました。

仕事を進める上でアプローチの仕方はいろいろあると思いますが、そこにエネルギーをかけることが大切です。何ごとも必死に取り組まなければ試練になりません。逃げずに頑張った結果が次へとつながっていきます。

地元に根付き、地域密着型のビジネスを展開する当社にとって、社員一人一人の頑張りの積み重ねが顧客との結び付き、信頼関係を深めることになります。建設業界でもデジタル化が進んでいますが、やはり最後は人が行う仕事なのです。

（にしば・しんいち）
1980年桐生工業高校土木科卒、前田道路入社。北陸支店長、執行役員北海道支店長、同北関東支店長（現任）などを経て、2023年から現職。栃木県出身、61歳。